
恋の隠し場所

バックハイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋の隠し場所

【Nコード】

N4306E

【作者名】

バックハイ

【あらすじ】

一年ぶりに出来た彼女に三日で振られた智博。そんな智博と元力ノ由恵が巻き起こすはちゃめちゃんな恋愛。前作「僕の宝物」の続編となっておりますが、主人公が変わったので初めての方でも楽しめると思います。智博を主役にしたのでコメディ要素が強くなっていました。

第1話（前書き）

安易な考えで智博と由恵をくっつけてしまいました。賛否両論あると思いますが応援よろしくお願いします。

第1話

「何それ！？本当、トモは最低！…いいよ…もう別れる…」

俺は、そう言つて席を立つ彼女の後ろ姿を眺めていた。
追い掛ける気になんて更々ならない。
女はいつもそうだ。
勝手にわがままで…

俺の名前は林田智博

チャームポイントはつぶらな瞳と大きな口。
好きなタイプは可愛い女の子。
基本は来る者拒まず、去る者追わず。

そんな俺だけど、付き合つて三日の彼女が…さっきまではいた。
まあ、すでに振られて彼女はどこかに行ってしまったが…。

…ちくしょう…

…一年ぶりの彼女だったのに…

…まだキスすらしてないのに…

それが今の本音。

俺は一人、ファミレスに取り残された。

テーブルのジュースを一口飲むと、伝票を手にレジへと向かう。

…ちくしょう…

やり切れない思いを吐き出せないまま外に出る。

彼女との付き合いは…

元々ノリだった。

俺の親友

長谷部誠…通称マコ

山崎竜輝…通称タツ

三人で行った合コンが彼女との出会いとなる。

その日来た女の子、藤井美咲は高校の頃から有名な超美人。

…なのだが…何故かマコが彼女のハートを射止め、二人はいい雰囲気
気に。

未だに二人が付き合っているのかどうかは謎だが…

二人はいつも一緒に居る。

次に、その日のメンバー千葉元子。
ショートカットのギャル系。元子はいつもサバサバしていて気持ちがいい。

元子はその後すぐにタツと付き合い始め、今は妊娠三ヶ月目。
来月入籍するらしい。

そして最後に平田由恵…。小さくて、ほんわかした可愛い系。
…だと思ってたのに…。

先程、俺に罵声を浴びせ置き去りにした張本人…。

美咲とマコはいい感じだし、元子とタツは来月入籍。

…俺達も付き合っちゃおうか？

と、ノリで言ってみたのが三日前の出来事だった。

すると意外に、由恵からの返事はOK…。

めでたく付き合い始めたのだが…。

「…トモ、今の言い方マコっばい！」

楽しそうに話す由恵。

しかし、俺は面白くない。

何故か？

一緒に居ても、三分に一度はマコの名前を出す由恵。

…元々、由恵はマコが好きだったんだ。

俺も最初は、そんな事気にも留めなかった。

…でも、付き合い始めてからも電話も会話も

マコマコマコマコ…！！

もう、流石の俺も喉の奥が
「イーッッ！」ってなって

「そんなにマコが良いなら、マコに言えば？…元々俺達が付き合っ
たのだって、ノリなんだし。」

…って言ってやった！

由恵はそれを聞くと解りやすい程に目に涙を溜めて、俺に罵声を浴

びせて出て行った。

…ふんっ！勝手にしやがれ！

…罪悪感？そんな物ないね

大体、由恵だって俺を好きな訳じゃない。
単に寂しかったただけだろ？

たまたま側に居たのが俺だった。
それだけの事。

「ただいま！」

俺は自分の家へと戻ると、ぶっきらぼうにそう言った。

…しかし…

玄関先に並んである小さな靴に目が止まる。

俺はそのままリビングへと足を進める。

…ガラッ…

ドアを開けるとそこに居たのは、姉ちゃんと由恵。

…さつき別れるって言って、俺を置き去りにしたくせに…

…何呑気に人んちでリラックスしてんだよ…

「智博！ほらお客さんなんだからお茶いれて！」

姉ちゃんが俺を見るなり、大きな声でそう言った。

俺は無視してリビングの外へ足を向ける。

…ボゴツ！

…痛い…

突然、後頭部に何かか飛んで来た。
俺は足元を見る。

…スリッパ…

…しかし俺の後頭部にスリッパが飛んで来る事なんて日常茶飯事。
俺は冷静に、スリッパを無視して足を進める。

…ボゴツ…

二個目のスリッパが後頭部に直撃する…

…流石の俺も二個は我慢出来ない…

振り向き、姉ちゃんに文句を…

…ボゴッ…

三個目のスリッパが俺の額を直撃した…

そして俺の視線の先には、

四個目のスリッパを手にして今にも投げ付けてきそうな由恵の姿が…

……。

…この野郎…

俺は無言で由恵を睨み付けると、台所へと足を向けた。

もちろんお茶を入れる為に

「…ひつどーい！そんな酷い男が居る訳！？」

姉ちゃんのわざとらしい声がリビングから聞こえて来る。

「有り得ないですよ！しかも謝りもしないんですよ！」

由恵もわざと大きな声で言っている…。

…大体、何であの二人があんなに仲良くなってるんだよ。

由恵は付き合う前から俺の家には何度か来ていた。

しかし、俺の家族は由恵を俺の彼女だと勘違いし、由恵と家族の一員の様に仲良くなり始めた。

特に姉ちゃんは由恵の様な妹が欲しかったらしく、一段と仲良くなっていた。

休みの日なんて一緒に買い物に行ったりもしていた。

…なので、俺と由恵の付き合いが一番喜んでいたのは姉ちゃんだっただ…。

「本当最低！そんな男別れて正解だよ！」

俺がお茶を持って行くと、姉ちゃんはソファーに踏ん反り返り、大

きな声でそう言った。

…バカヤロウ…

「やっぱりそうですよね！もう、綺麗さっぱり忘れちゃったけどね！」

由恵も俺を無視して話を進める。

…お前なんてマコオタクなくせに…

……。

俺はテーブルにお茶を置くと、退散するためにリビングの外へと足を…

…ガチャ！

俺がドアノブに手をかけるよりも早く、ドアが開く。

「あら！由恵ちゃん来てたの？今お菓子出すから待っててね。」

そう、満面の笑みで入って来たのは…

…母ちゃん…

「あつ！こんにちは。お邪魔しました。」

由恵はそう言つて席を立つと、母ちゃんに向かってペコリと頭を下げた。

母ちゃんはそんな由恵を見ると嬉しそうにニコニコしながら

「あらやだ…そんなに改まらないで。」

と言いながら姉ちゃんの隣に腰掛けた。

すると、姉ちゃんは俺の方をちらつと見てから、

「ねえ、聞いてよ！由恵ちゃん馬鹿な彼氏と別れたらしいよ！」

…と続けた…。

…母ちゃんにまで言つなよ

もちろん、母ちゃんは驚いた様子で俺を睨みつけた。

……。

「由恵！」

俺は慌てて由恵の手を引き、自分の部屋へと駆け込む。

…最悪だ…

絶対、今日の夕飯俺の分だけ抜かれてる…

…きつとこれから三日位は家族総出で俺を無視するんだ…

……。

俺はちらりと由恵を見る。

由恵はベットに腰掛けるとニコニコと俺を見ていた。

第2話

「大体、さっき別れるって言ったくせに何で俺の家に居るんだよ！」

俺は由恵を睨みながらそう言った。

「だって、付き合った時に一番最初に報告したのお姉さんだし！別れた事も一番最初に報告しなきゃ！」

由恵はそっぽを向きながらそう答えた。

「大体、由恵がマコマコマコマコ！って煩いのが原因なのに、何で俺が悪者なんだよ！」

俺は、こっちを向かない由恵の横顔を睨みながらも続けた。

由恵はその言葉を聞くなり、顔をこちらに向けて俺を睨み付けながら

「そんなにマコマコ言ってないよ！大体、ノリで付き合った彼氏なんかにそこまで言われたくないし！」

と言った。

…むかつく…

…何だよそれ…ノリで付き合ったのは自分も一緒だろ？

「大体、まだ俺よりもマコが好きなくせに自分を正当化すんじゃないよ！」

俺は少し声を荒げてそう言った。

…由恵の顔色がみるみる変わる…

…しまった…少し言い過ぎたか…

「そつだよ！？トモなんかよりもマコの方が何倍も大好き！！悪い！？」

由恵も声を荒げてそつ返した。

……。

…むかつく…

…むかつくむかつくむかつくむかつく！！

少しでも言い過ぎた事を後悔した俺が馬鹿だった！

…もついい…

そこまで言うなら…

「わかったよ！そんなにマコが好きなら協力してやるよ！」

俺の言葉に、由恵は驚いて俺を見つめる。

「…何それ…大体マコには美咲が…」

「俺の予想ではあの二人はまだ付き合っていない！…おそらく、特別な進展もしてない！」 特別

俺は由恵の言葉を遮って断言した。

由恵は困ったように俯くと

「…でも…」

と呟いた。

俺はそんな由恵をちらりと見てから言葉を続ける。

「…その代わり！…由恵も協力しろよな！俺と美咲の事！」

俺の言葉に由恵は顔を上げて睨みつけると

「何それ！？自分が美咲とどうにかなりたいたけ！？大体、まだ美咲と付き合おうなんて思ってたの！？」

と、声を荒げた。

俺はそんな由恵をちらりと見てからため息をつく。

…馬鹿だな…

俺が美咲と付き合いたいと思ってるかって？

そんなの…

「当たり前じゃないか！マジ、美咲みたいな超美人いつだって付き合いたいに決まってるだろ？」

俺の言葉に由恵は押し黙る。

…もちろんこの言葉は本心だ！

ただ、一つ補足を付けるなら…

美咲とは付き合いたいとは思っけど、親友の好きな人に手を出すつもりはさらさらない！

…でも、そうでも言わないと由恵は踏ん切りをつけないだろう。

…これ以上マコの影を引きずる由恵を見るのが嫌だったんだ。

由恵はしばらく俯いていたが、顔を上げると

「…分かった！トモと美咲の事、協力する！」

と言ってガッツポーズをして見せた。

それから俺は引き出しからペンとノートを取り出した。

「よし！作戦会議開始だ！」

俺の言葉に由恵も大きく頷いた。

第3話

「…ねえトモ、本当に大丈夫なの？」

由恵が後部座席から運転席を覗き込んで聞いてきた。

あれから一週間後の週末…

俺と由恵は作戦を実行する為に出掛けていた。

もちろんこれからマコと美咲を迎えに行くのだ。

「大丈夫！任せなさい！」

俺は笑顔でルームミラーに写る由恵に言葉をかけた。

マコと美咲は、三日間だけだが俺と由恵が付き合っていた事を知らない。

つまり、作戦を実行するのにとっても好都合だ！

第一の作戦…

まずは美咲を助手席に乗せる。

…つまりは後部座席に由恵とマコを隣同士に乗せる為だ。そこで、由恵はマコに猛烈なアプローチ。

勿論、美咲は気が気じゃないはずだ…。

俺は車を待ち合わせの駅前へと走らせる。

マコと美咲はすでに来ていた。

…二人で楽しそうに話をしている…

…ちくしょう…マコばかり…

俺は車の中から二人を睨み、車を路肩に寄せて停車した。

…すぐに運転席から外にでる。

ここからはタツ仕込みのテクニックで美咲を助手席へ誘導…

……。

…するはずが…

俺が外に出て、誘導する前に助手席に乗り込みシートベルトを付け始めるマコ…

美咲も楽しそうに話しながら後部座席に乗り込んだ後だった…。

一人、車の外に取り残された俺…。

…マコが不思議そうに俺を見つめている…。

…バカヤロウ…

…しょうがないので、そのまま運転席に戻る事にした。

…由恵の冷たい視線が心を傷める…

「どうしたんだ？トイレでも行きたかったのか？」

車に乗り込むと、マコが不思議そうに尋ねてきた。

俺は…

「…外の空気が吸いたかったただだよ」

と、小さく呟くので精一杯だった…。

…しかし！

こんな事でくじけるトモくんじゃない！

作戦はまだまだある！

俺達は予定通りに、車で一時間程にある水族館へとやって来た。

第二の作戦…

それは題して…

「トモくん、美咲と迷子！の巻き」である。

今日は週末…水族館は予想通りに人込みだ！
俺達は入館する際の人込みに飲まれて行く。

…チャンス！

俺はどさくさに紛れて美咲の手を引く。
そのまま人の波に流される。

マコと美咲は遙か後方に…

……

……？

マコと美咲が遙か後方に？

俺は慌てて掴んだ手の主を見る。
その先には…

「…馬鹿…」

…大きくため息を付く由恵がいた。

間違えた…。

そう気付いても時は遅く…

俺と由恵は人の波に流されて行く。

…マコ…美咲…さようなら

俺は心の中で二人に小さく手を振った。

「…もう…これじゃ、トモと美咲をくつつける作戦が台なしだよ！」

由恵はそう言いながら、大きな水槽を泳ぐ鯨を眺めていた。

「俺と美咲をくつつける作戦じゃなくて、由恵とマコをくつつける作戦だろ？」

俺も視線は鯨に釘付けになりながら、由恵に言い返す。

由恵は小さくため息を付くと

「…もう、どっちでもいいよ…」

と、呟いた。

しかし、俺と美咲が迷子になる予定が…マコと美咲が迷子になってしまふとは…

そんな事を考えながら、後方へと視線を移す。

そろそろマコ達が追いついて来てもいい頃なのに…

すると、人込みに紛れてマコの姿を発見した！

…よし！改めて作戦開始！

……。

……。

何でマコと美咲はどさくさに紛れて手を繋いでいるの？

しかも二人ではにかみ合って…

どうからどう見てもラブラブカップルにしか見えませんが…

……。

俺の視線に気付いたマコは、俺の姿を見つけるなりこっちにやってきた。

…ふうん…

せっかく手を繋いでたのに、わざわざ手を離してからこっちに来るんだ…。

俺はひたすらマコを睨み付ける。

「…何だよ？」

マコが俺の視線に、不思議そうに顔をしかめて聞いてくる。

「…別に！」

俺は、わざとらしくマコを無視して一人で水中トンネルへと足を進めた。

第4話

「トモっ！」

由恵が俺の後ろを追い掛けて来る。

……。

「…何で由恵が追い掛けて来る訳？由恵はちゃんとマコの隣をキープしておいてよ！」

「…だって…二人共楽しそうに話してるのに邪魔なんて出来ないよ…。」

由恵は俺の言葉にそう答えると、少し俯いてシュンとしていた。

…もっっ！

俺はそんな由恵の手を引いて水中トンネルの真ん中まで歩きだした。

「ほら！上見てごらん。タコだぜ！？タコ！」

俺の言葉に由恵は視線を上へと移す。

「…うわぁ！凄い！タコが泳いでるよ！美味しそうだね？」

由恵はそう言つと、楽しそうな笑顔で俺を見た。

「踊り食い！いいね！超旨そう！」

俺もそう言つて由恵を見る

…だって、あの吸盤とか…

超旨そう！

俺は由恵と二人で口を開けながらタコを眺めていた。

…バシッ！

…痛い…

「水族館に来てよだれ垂らしてる奴初めて見たよ…」

俺は叩かれた後頭部を抑えながらマコを睨む。

「…アハハ！本当によだれ出てるよ！」

美咲が続けてそう言うのと、俺の口元にハンカチを当てた。

…そのハンカチが凄くいい匂いで…

…萌え…

「トモ！カニ！カニ！」

すかさず由恵が叫び出す。

俺は由恵の指差す方へと視線を移す。

本当だ！カニがいる！

「「超旨そう！」」

由恵と声が揃ってしまふ。

「…アハハっ！」

後ろからマコと美咲が、腹を抱えて笑っていたがそんなの構うもんか！

俺はカニが食いたい！

唯一、この気持ちを解ってくれる由恵へと視線を移す。

由恵は大きな口を開けながら、じーっと水槽を眺めていた。

……。

…萎え…

「カニピラフとタコのマリネ！」

またも由恵と口を揃えて答えてしまう…

俺達は昼飯を食いに來ていた。

メニューを見ていて目に止まるのは…やっぱりタコとカニ。

…だって…超食いたかったんだよ。

マコと美咲はクスクス笑いながらメニューを見ている。

…やっぱりこの二人、お似合いだよな…

残念だけど由恵の入る隙間はなさそうだ。

「…何だよ…気持ち悪いな！」

マコの言葉に、マコを見つめていた自分に気付く。

俺は隣にいるマコにぴったりと身を寄せて、小さな声で

「マコと美咲ってどこまで進んでるの？」

と聞いてみた…。

「トモ！」

慌てて口を出して来たのは

…由恵…

…聞こえてたのかよ…

思わず、美咲に視線を移す。

美咲はクスクス笑いながら

「私は、トモと由恵の方が気になるけど？」

と、返してきた。

その言葉に慌てたのは

… 由恵…

「美咲！私はトモとはそんな関係じゃないよ！大体トモなんてデリカシーないし大嫌い！」

そう言つて俺を睨み付けやがった…。

マコと美咲は大きな声で笑いだす…。

… ちくしょう…

美咲の様子を見てれば、マコと美咲はまだ何も無い事はわかる…。

むしろ、怪しいのは由恵だろ…

あんなに慌てて、何かあったって言うてるようなもんじゃないか。

… キスだつてしてないのに

たかだかノリで三日付き合っただけだろ？

…しかも大嫌いって…

俺は無言で由恵を睨み付けてから、手元の水を一気に飲み干した。

第5話

あれから俺達は買い物をしたり、海を見に行ったりと遊びまわり、帰りの車に乗った頃には夜になっていた。

…作戦？

そんなの随分前に諦めた！

だって何をしてもし上手くいかずに、マコと美咲は二人でいい感じだし…

何気に由恵と一緒にいるのも楽しかったし…

ま、いつか！って感じで遊びまわってた。

…それにしても…

「何でお前が助手席に座ってるの？」

俺は隣に座る由恵に小声で話しかけた。

「智博が寂しくないように気を使っただろ！」

後からマコが答える。

…聞こえてるのかよ…

「気なんて使って貰わなくていいよ！俺はマコが隣に居て欲しかった！」

俺は後に座るマコにムキになって答える。

隣から由恵が驚いた顔で俺を見つめていた。

「…智博…僕はそういう趣味はないぞ…。」

マコが小さくそう言った。

…変な言い方をしてしまったようだ。

もちろん俺だってそんな趣味はない。

だけど…

「…手くらい握って欲しかった…」

俺はそつと呟いた。

もちろん冗談だ！

しかし、マコからの返事がない…

俺はルームミラーで後部座席を覗いてみた。

マコは口を開けたまま固まっていた…。

…冗談の通じない男だ…

………？

…あれ？

車がゆっくりと止まりだした。

アクセルを踏んでも進まない…

俺は慌てて車を路肩に寄せる。

同時に、車は完全に止まってしまった…。

…マジかよ…

皆もそれに驚いている。

マコは一旦外に出てから、運転席のドアを開けると鍵を回してエン

ジンをかける。

しかし、一旦エンジンはかかって、直ぐに止まっていく…

「…智博…一つ質問してもいいか？」

マコがそう呟いたので、俺はマコへと目を向ける。

マコは俺の顔を見てから口を開いた。

「…ガソリン入ってたか？」

……。

俺は口を開けたままマコを見つめる。

…ガソリン入れるの忘れてた…

「信じらんねえ！ガス欠で車止める奴が本当にいるなんて！」

…マコの言葉に何も返事を返せない…

…俺だってガス欠で車を止める奴が居るなんて、初めて知ったよ。

「…しょうがない…ガソリン買いに行くか…その前に車を移動するから智博押して!」

マコが大きなため息をついてそう言った。

俺は車から降りると、後に回って深呼吸した。

…ふんっ!

力いっぱい車を押す!

…だが、びくともしない…

「…何やってんの?」

突然掛けられた声に顔をあげると…

…マコが仁王立ちで睨んでいた…

「…まだ押しても意味ないだろ?僕が合図してから押してくれよ…」

…なるほど…

「私も手伝うよ!」

美咲がそう言いながら俺の隣にやってきた。
反対隣には由恵が来た。

…女の子に挟まれる俺…

超いいっ!

…しかし…

「三人も居たらスピード出過ぎちゃうよ。二人は車を降りてくれるだけでいいからさ!」

…と言うマコ…

…俺のハーレムを邪魔するなよ!

そしてマコは運転席のドアを開けると、ハザードをたいてハンドルを持ったまま車を押し始める。

ゆっくりと動き出す車…。

「智博!押して!」

マコの言葉に俺も力いっぱい車を押す。

車は浚に動き出す。

…さっきまでびくともしなかったのに…

そのままゆっくりとコンビニの駐車場へと車を入れる。

「よし！オツケー！あとはガソリンだ！」

マコが車の鍵をかけながらそう言ってニカッと笑いかけた…

…ちくしょう…マコがかっこよく見えるじゃないか…

…ほら見るよ！由恵も美咲もマコをうっとり見つめて居るし！

…しかし！

俺にはまだ作戦がある！

さっき車を押しながら考えた作戦だ！

…この作戦が成功すれば…

かなりの美味しいオマケがつくかも…。

「智博！ガソリン買いに行くぞ！」

マコがそう言って道路へと足を向ける。

「マコ！待って！…今の時間じゃガソスタやってないよ…」

俺の言葉に時計を覗いたマコ。

…時間は9時を少し過ぎたところだった。

「24時間やってるガソスタなんていくらでも…」

マコはそう言うのと、思い出したように言葉を止めた。

そしてがっくりと肩を落として口を開いた。

「…駄目だ。セルフじゃ、ガソリンを売ってくれないんだった。」

…そうなのです！

セルフではガソリンを容器で売る事はできません！

…つまり…

今の時間もやっているセルフ以外のガソスタを探さなければいけな

いのです！

…面倒臭いでしょ？

という訳で、ここで作戦を実行！

「…もう今日はさ、どっかに泊まっちゃわない？」

俺はそう言ってから皆の顔を見た。

第6話

「…何でこうなるんだよ」

俺はベットに座り楽しそうに携帯をいじっている由恵に視線を移す。

…事の始まりは二時間前…

俺の提案に戸惑いながらも賛成した三人。

俺は強行突破でタクシーを止め、近くのラブホテルまで向かって貰った。

ラブホテルと聞いて固まってしまった美咲とマコ。

俺はそんなのお構いなしで、隣に座る由恵に小さな声で囁いた。

「…由恵、いいか？覚悟を決めるんだ！」

俺の言葉に、由恵は力強く頷いた。

「…ブホッ！…ゴホゴホッ！」

助手席でマコが変な咳をし始める。

…風邪でも引いたのか？

まあ、マコが風邪をひこうが関係ない！

俺はこれから起こるであろう出来事に胸を高鳴らせた。

これから向かうのはラブホテル…

まさか、男同士で部屋を借りるわけには行かない。

つまり必然的に男女ペアになる訳だ！

勿論俺の頭の中では、俺と美咲、マコと由恵のペアを組む予定だ。

…後は由恵のおいろけ作戦でマコを落とす！

さすがのマコも、ラブホのおいろけ作戦では落ちるに決まってる！

俺と美咲は…

チャンスがあれば嬉しい方向へ…

俺は一人でニヤニヤしながら、見え始めたラブホテルを見つめていた。

…なのに…

ラブホに着くなり、二人で部屋を選び始めるマコと美咲…

何故？

いつものマコなら動揺するハズだろ？

いつもの美咲なら警戒するハズだろ？

…もしかして…！

「マコ！」

俺はマコの腕を掴み、壁側まで引つ張る。

「マコと美咲ってもうやっちゃったの!？」

…バシッ！

俺が話し終わらない内にマコに頭を叩かれる。

「そんな訳ないだろ？部屋を借りるのは男女ペアでも、後からこっそり入れ代わればいいだろ？」

マコはそう言って顔をしかめると、今度は由恵を見ながら小さな声

で…

「…智博こそ…由恵に覚悟を決めろって…どういつ関係なんだよお前達？」

…と聞いてきた。

…さっきの会話、聞こえてたのかよ…

それにしても、こっそり入れ代わるって…結局マコと寝るのか…

しょうがない。由恵の代わりに、俺がおいろけ作戦実行するか…

俺はマコの質問に答えるのを忘れたまま、部屋を選んでいる由恵の元へと足を向けた。

…ハズなのに…

何故か部屋に居るのは由恵

……

「…マコと部屋を交換しに行けよ…」

俺は由恵を睨みながら言う。

由恵はそんな俺を気にも留めない様子で

「嫌だよ。この部屋気に入ってるんだよ！」

と続けた。

…もういい…

「わかった。俺が美咲と交換しに行く！」

俺はそう言って荷物を手にする。

…しかし、由恵に掴まれた腕がそれを邪魔した。

「…何で？私と一緒にマコの方がいいの？」

由恵は下から俺を見つめながらそう言った。

…そんなの…

「当たり前じゃないか！マコと美咲が二人で泊まるなんて考えただけでも羨ましい！」

俺がそう言つと、由恵は少し怒つた様子で

「もういい！私お風呂に入るから勝手にしたら！？」

と言つて、風呂場へと足を向けた。

…何怒つてんだよ？

俺は由恵が怒つた理由がわからないままベットへと腰を降ろす。

…美咲と部屋を交換しに行くか…

…でも…

風呂から聞こえてくるシャワーの音…

俺の足は自然と風呂場へ向かつてしまう。

…曇りガラスにうつすらと映る由恵の姿…

…これはヤバイ…

俺は黙って曇りガラスを見続ける。

「……トモ？何してるの？」

曇りガラスの向こうから由恵の声が聞こえてきた。

俺は正直に

「覗き。」

と答えてみる。

すると聞こえてきた由恵の

「……最低。」

の声。

……？

あれ？でも、怒ってはいない……よな？

「……トモ、私出たいから退けて？」

由恵の声に、俺は部屋へと足を向け……

……る訳がない！

「わかった」

と返事だけして、壁に隠れる俺。

勿論、顔だけそーっと向ける。

曇りガラスがキーツと開く。

由恵の手が伸びてきてバスタオルを掴む。

…そして…

バスタオルで身体を隠しただけの由恵が姿を現した！

…萌え…

そのまま下着を付けて行く由恵。

…そして…

「キヤー！トモ何してんの！？最低！」

…と響いた由恵の声…

俺は慌てて部屋に戻るとそのままベットに潜り込んだ。

第7話

「トモ！何隠れてんの！？」

由恵がそう言つて俺が被つていた布団をめくり上げる。

……！

俺は由恵の格好に釘付けになる。

男物のＴシャツにトランクス…

何とも萌えじゃないか…

…しかし…

「そのＴシャツとパンツどつしたの？」

俺の質問に、由恵はニコツと笑うと

「さっきコンビニで買ってきたんだよ。」

と答えた。

なるほど。さつき、俺が泊まろうって言ってから由恵と美咲はコンビニへと買い物をしに行ったな。

…て事は…

「美咲も同じ格好してるのか？」

俺の言葉に由恵は少し考えた様子で

「多分、美咲も買ってたからそうじゃないかな？」

と答えた。

…美咲もそんな格好を…

…萌え…

…という事は？今頃マコは美咲のそんな姿を見ているのか？

…ずるい！ずるいずるい！

俺は慌てて部屋の出口へと足を向ける。

しかし、直ぐさま由恵に腕を掴まれた。

「どこ行くの？今更マコの所に行っ たって邪魔になるだけだよ？」

由恵は俺を睨みながらそう言った。

…確かに…今マコの部屋に行って、二人がお取り込み中だったりしたら…

…俺、立ち直れないや…

俺は、このやり切れない思いを由恵を睨み付ける事で解消しながら風呂場へと足を向けた。

そして

「覗くなよ！」

と由恵に釘をさして洋服を脱ぎ始めた。

…それにしても…問題はマコだ…

何でこんな事になってしまったんだろう。

上手く行けば今頃、俺と美咲のアバンチュールが待ってたのかもしれないのに。

このラブホテルがマコと美咲の記念すべき場所になるのかもしれない。

それは嫌すぎる！

俺なんて一年も彼女が居なくて、寂しい毎日を送ってるのに…。

…ああ、三日だけの彼女なら居たかな？

「…ふう…」

俺はバスタオルを腰に巻き、風呂の外へと出てきた。

…

…！！

「ギャーっ！？」

俺は鏡に写る背後の首に腰を抜かした。

「…由恵…！？何覗いてんだよ！？お前は痴女か？」

俺は振り返り、後ろで笑い転げている由恵を睨み付けた。

「アハハ！びっくりするでしょ？さっきのお返し！」

由恵は楽しそうにそう言うと、笑いながら部屋へと戻って行った。

…むかつく…

俺は冷蔵庫から缶ビールを取り出すと、蓋を開けながらベットへと腰を降ろした。

由恵はベットの上で正座して俺を眺めていたが、俺はそんな由恵を無視したままビールで喉を潤した。

「ねえ、何怒ってんの？」

後から聞こえる由恵の言葉。
しかし俺は何も答えない。

「美咲の事気になるの？」

その質問にも答えない。

「美咲の事好きなの？」

…しつこい…。

俺は振り向き由恵を睨む。

「…三日だけの彼女よりも美咲が好き？」

由恵はそう言うと、少し不安げな表情をして見せた。

「…三日だけの彼女って言っても、何もしてないだろ？」

俺はそんな由恵を一瞥してから口を開いた。

由恵はその言葉に俺を睨みながら

「何もしなきゃ彼女じゃない訳？好きな気持ちも沸かないの？」

と言い返す。

…由恵…

…そんな事は…

「当たり前じゃないか！心も身体も相手を求めて、初めて恋しくなる！」

俺は言い切った。

はつきり言う！

俺は可愛い女の子が大好きだ！

だから特別可愛い美咲はもっと大好きだ！

勿論、由恵も可愛いからそれなりに好きだけど…

何にもしてない内から特別なんて

有り得ないだろ？

だから俺はマコが不思議でしょうがない。
何であそこまで美咲を想えるのか。

俺は押し黙った由恵をちらりと見てから、空になった缶ビールをテーブルの上へ置いた。

「…ようか？」

不意に由恵が何かを言ったので、俺は由恵へと視線を移す。
由恵は少し俯いていた視線を俺へと向けると、力強く口を開いた。

「…試してみようか？トモが私を好きになるのか。」

第8話（前書き）

試す？何を？…もちろん大人の関係です。

第8話

「…試してみる？トモが私を好きになるか。」

…昨日の由恵の言葉が頭に残る。

俺は隣を歩くマコへと視線を移した。

「マコ？昨日、美咲と何かあった？」

俺の言葉に、マコは俺を睨み付けると

「ある訳ないだろ！？大体、何で部屋交換に来なかったんだよ？お前等の方が怪しいだろ？…おかげで僕は寝不足だし。」

と返してきた。

マコの話によれば、美咲も由恵に部屋を交換の話はしたらしい。しかし、由恵からの返事は

「…気が向いたら行く」

だったらしく、マコと美咲は由恵が来るのを待ってたらしい。しかし由恵はいつまで経っても来なかった。

ので、美咲はベットに、

マコはソファで眠りについちゃらしい。

俺はそんなマコの話聞きながら、見え始めたコンビニをぼーっと眺めていた。

「ただいま！」

マコが由恵と美咲に声をかける。

二人は止まってしまった俺の車の前で楽しそうに話し込んでいた。

しかし、俺達の姿を見付けるなり笑顔で

「おかえり」

と声を揃えた。

俺は一瞬由恵と目が合ったが、慌てて視線を他へと逸らす。

マコはガソリントankにガソリンを入れていた。

俺はそれを手伝う振りをして、由恵からの視線に逃げていた。

…俺の中に広がる罪悪感…

誰に対して？

そんなの由恵に決まってる。

…正直に言おう…

…俺は試した。…昨日の夜。

試した…と言うよりも…

…我慢できなかった。

当たり前だろ！あんな密室で！あんな挑発されて！

…据え膳喰らうは男の恥！

あれで我慢出来る男が居るなら会ってみたいもんだ！

俺は、ちらりと視線をマコへと移す。

…多分、マコ位だろうな。

密室で手を出さない男なんて…。

…はあ…

何だか今日のマコが格好よく見える。

凄いよ…。美咲と何もなかったなんて。

…俺はますます罪悪感に駆られ始めた。

「トモ！全部マコに任せっきりじゃん！」

由恵が悪戯気に俺を覗き込むとそう言って笑って見せた。

…何でこいつはこんなに普通に普通で居られるんだよ…

俺はそんな由恵を無視すると、運転席へと乗り込んだ。

…しかし…

「…だから何でお前が隣に乗るんだよ…」

俺の言葉に、助手席に座った由恵は俺を覗き込むと

「トモが私を無視するからだよ？」

と言って笑って見せた。

マコと美咲は片付けを済ませてから、車に乗り込むと二人で楽しそうに話していた。

… 帰りの車内…

… 何なんだこの温度差は…

後では楽しそうなマコと美咲。

時折マコが眠たそうに欠伸をすると、美咲はマコをとて愛おしそうに見て、微笑んでいた。

それに比べて俺と由恵は…

ずっと無言のまま…。

時折由恵は俺へと話し掛けてくるが、俺は軽く返事をするともた黙って運転を始める。

… 何でかわからないが胸のモヤモヤが取れなかった。

由恵に対する罪悪感なのか

マコに対する劣等感なのか

どちらにしても、俺は昨日の出来事を後悔していた。

… 何で我慢出来なかったんだよ…

今まで、こんな気持ちに襲われた事なんかなかった。

今までの彼女とそういう関係になった時は、やっと出来たと達成感に包まれていたし、

一夜限りでそういう関係になった時は、ラッキーだとは思っていなかった。

なのに…今は広がるこの胸のモヤモヤ。

「…はあ…」

俺は大きくため息をつく、ちらりと由恵へと視線を移す。

由恵はぼんやりと外を眺めたまま、俺の視線なんかには気付かない様子だった。

「じゃあ気をつけて帰れよ！」

車を駅前へと停車させると、マコと美咲はそう言って降りて行った。

…というか…

「…お前も降りろよ。」

俺の声に、助手席に座る由恵はじっと俺を見つめた。

「嫌！私トモンち行くんだもん！」

由恵の一言に俺は開いた口が塞がらなくなる。

「…何しに来るんだよ…」

俺の言葉に由恵は俺を見つめたまま

「トモの気持ちを確かめに！」

と言った。

俺は小さくため息をついてから

「…姉ちゃんに余計な事言っくなよ…」

と言って車を走らせた。

第9話（前書き）

トモファンの皆様…トモを嫌いにならないで下さい…（汗

第9話

「…で？俺に何の用だよ？」

俺はベットに転がり楽しそうに雑誌を広げる由恵を見ながらそう言
った。

「言っただでしょ？トモの気持ちを確かめに来たの！」

由恵は雑誌を読む手を止めずにそう答える。

…確かめるって何をだよ…

俺は何も答えないままベットに腰を降ろす。

「私はトモの特別になれた？」

由恵は俺の顔を下から覗き込むとそう聞いてきた…。

…俺は何も答えられない。

…由恵の質問は、俺の中の罪悪感を更に引き立たせた。

…由恵をどう思っているのか正直わからなかった。

…だけでも。

俺の視線は、ついつい由恵の腕に行ってしまう。

由恵のキャミソールから伸びている白い腕が、昨日の夜の出来事を思い出させる。

…駄目だ！我慢しろ俺！

頭に鳴り響く警告音。

しかし…

俺は由恵の腕を掴むと、グイッと引き寄せる。

途端に由恵の身体は俺の腕の中に収まった。

…駄目だ…駄目だ駄目だ！

頭の中とは裏腹に、俺は由恵に深いキスをしてしまう。

…そしてそのまま性欲に身を任せる俺…。

…最低だ…

あんなに後悔していたのに

結局、我慢出来ないんじゃないか…。

俺は隣で眠る由恵へと視線を移す。

「…由恵。そろそろ起きろ！」

もう外は薄暗くなっていた

由恵は眠たそうに目を擦ると、毛布で身体を隠して起き上がった。

…本当だったらこれも萌えポイントなんだけど…

何故か、今の俺には萌えなかった。

…男って薄情だよな…

また酷い罪悪感に駆られる

「…そろそろ送るよ。」

俺は由恵の頭をポンと叩いてそう言った。

…ボスンっ！

ベツトに倒れ込む俺。

布団には由恵の甘い香水の香りが僅かに残っていた。それが俺の胸をめちゃくちゃに締め上げた。

…何でやっちゃうんだよ。

俺はベツトに置かれていた雑誌に視線を移す。

手を伸ばし雑誌を取るとぺらぺらと巡ってみる。

由恵の好きそうなふわふわの格好をした女の子達。

丁寧に巻かれた髪が由恵を思い出させた。

…俺は由恵が嫌いな訳じゃない。

むしろ好きな方だ。

由恵と居るのは楽しいし。

…でも、そんな大事な友達を汚してしまった。

…ただの性欲で。

…その気持ちの方が強かった。

由恵を送りに行った時

俺は由恵に

「付き合おうか」
と言った。

そう言う事で自分の中の罪悪感を取り払いたかったのだ…。

しかし、由恵からの返事は

「ヤダ！」
の一言だった。

…正直、俺はホッとしていた。

由恵も俺に恋をしている訳じゃない。
それが、由恵も同じ過ちを侵した仲間のよう
に勝手に思っていたんだ…。

俺は携帯を取り出すとメール作成の画面を開く。

送信者の所に由恵のアドレスを打ち込む。

「今日は本当にごめん」

そう入れてから、消去する

…ごめんはマズイよな…

「昨日は楽しかった」

そしてまた消去。

…俺の脳裏に浮かぶ昨日の出来事は…ベットの
上の出来事しか思い浮かばなくなっていた。

結局、何て送ればいいのかわからずに

「また連絡する」それだけ打ち込むと送信した。

第10話

「…信じらんない！」

私はそう言つと、手にしていた携帯電話を放り投げた。

「また連絡する」

それがトモから送られてきたメールだった。

絵文字も入ってないし、短いし！
それに『また』っていつ？

私はそれまでトモからの連絡を待たないといけないの！？

イライラする。

何がつて…トモの態度が！

急に冷たくなるなんて！

そんな解りやすい態度取らないでよ！

…ボスンっ！

私はベットに倒れ込むと、枕に顔を埋めて溢れ出した涙を堪えようとしていた。

…トモの目に私はどう映ってるんだろう。

好きでもない男と簡単に寝ちやう軽い女？

…好きでもない男と簡単に寝れる訳ないじゃん…

…トモだからなのに…

あの男はそれに気付いてない…。

…悔しい！

私にとって、トモはこんなに特別なのに！

なのに…私とマコをくつつけるとか…自分と美咲がくつつくとか！
訳分らない作戦ばかり！

ガス欠で車を止めるし…
泊まろう！なんてミエミエの作戦立てるし！

しかも、一緒に寝るのが私よりもマコがいいって…

馬鹿にしすぎ！

… 本当に何であんな最低男を好きになんかなっちゃったんだろう…

トモなんてマコみたいに優しくないし！

マコみたいに考えて行動しないし！

マコみたいに気を使わないし！

マコみたいに…！

……。

（由恵だっていつもマコマコマコ言ってるだろ！？）

頭に浮かぶトモの言葉。

… 私の胸がチクリと痛む。

自分でも気付かなかったよ。

こんなに頭の中がトモだらけになってたなんて…。

私はグルンと寝返りをうつ。

その拍子に、私の身体からトモのつけてたブルガリの香水の残り香がした。

それが私の胸を締め上げる

…お風呂に入るのが勿体ない。

もう少しトモの香りに包まれていたかった。

帰りの車内。

トモは私に

「付き合おう」

って言ってくれた。

…トモからの二度目の告白

付き合える訳ない

こんなに好きなのは私だけだって解り切ってる。

それに、身体を重ねた今

また

「ノリ」だなんて言われたら、もう立ち直れる自信ないよ。

私は放り投げた携帯電話に手を伸ばす。

「また連絡する」

トモからのメールを見つめた。

第11話

あれから俺は由恵に連絡する事が出来ないまま、一ヶ月たっていた…。

なんて言っただけ電話をかければいいのか…

どんな顔して会えばいいのか…

そんな事ばかりが頭を巡り、結局何も出来なかった。

…それに、会ったらまた由恵を抱いてしまつかもしれない…

それが、俺の考え全てをストップさせていた。

しかし、今日は何が何でも由恵に会わなくてはならない…

俺は目の前の鏡に写る自分の髪をワックスで整えていく。

「よし！完璧カッコイイ」

いつも以上に満足のいく仕上がり思わず顔がにやける。
そのままネクタイも直す。

「随分気合い入ってるねー！」

…！

突然後から掛けられた声に驚き振り向く。

「…姉ちゃん…勝手に除くなよ！」

俺の言葉に、姉ちゃんは俺を睨み付けると

「…勝手にって！ここは家族で使う洗面台でしょ？何であんたの許可が必要な訳！？」

と、怒鳴り付けた。

…もう…朝から煩いよ…

俺は姉ちゃんを無視して身嗜みを整える。

「大体さ、タツも結婚披露パーティーなら私も呼べばいいのに！」

姉ちゃんは俺をちらりと見てからブツブツと呟き始める。

…何で姉ちゃんを呼ばなきゃなんないんだよ…

俺は鏡越しに、ブツブツ言いながら戻っていく姉ちゃんを見送り、また鏡の自分と向き合った。

そう。今日はタツと元子の結婚披露パーティーがあるのだ。

出来ちゃった婚で、ちゃんとした式は挙げられなかったけど、代わりに小さなお店を貸し切って友達だけでパーティーをするのだ。

なので、学生時代の友達にも久々に会えるし、楽しみなイベントではあるのだが…

「…はあ…」

俺は、一週間程前にかかって来たタツからの電話を思い出し、ため息をついた。

…俺の頭を悩ませる事…

もちろん、由恵の事は今の俺には最大限の悩みなのだが…

それ以外にも増えていきそうな厄介事を想像する…

マコに何て言い出そうか…

俺はもう一度ため息をつく、玄関へと足を進めた。

「おはよう！」

マコがそう言って助手席へと乗り込んできた。

スーツ姿のマコは、何だかいつもよりも好青年な感じで、俺はルーミミラーで自分の顔をのぞき見てしまう。

いつもよりキマッていると思っていた髪型は、何だか安っぽいホストを連想させて少し悔しくなった。

…俺はそんなマコをちらりと見てから、マコの家から車を走らせる。

…さて、何て話を切り出そうか…

出来るだけ遠回しに…

マコが帰ってしまわない様に…

信号が赤になり、俺はブレーキを踏む。

そして、大きく深呼吸するとちらりとマコを見て口を開いた。

「…マコ。今日純子も来るの知ってる？」

俺の言葉にマコは口を大きく開けて俺を見詰めた。

…しまった…

あまりにも大事な部分から話始めてしまったかな…

まあいいや…

俺は、マコをちらりと見てから信号が青になると同時に車を走らせた。

マコはまだ、口を開けたまま俺を見つめていた。

…純子ってのは、実はマコの元カノ。すげえワガママで、マコは散々振り回されてた。

マコにとっては会いたくない相手だろう。

まあ、俺にとっても会いたくない相手でもあるんだけど…。

「…なんかさ、元子って昌栄中学だったらしいんだよね。…ほら、純子も昌栄だったじゃん？」

俺は真っ直ぐ前を見たまま言葉を続けた。

「あんまり仲良い訳じゃないみたいだけど、一応同じグループだったらしくてさ…タツも純子が来るとは思ってたらしいんだけど…名簿を見たら名前があったらしくてさ…。」

俺はそう言いながら慌てて電話をよこしたタツを思い浮かべた。

（…頼むよ！マコに上手く言っておいてよ！俺もそんな事考えもしなかったから、ちゃんと名簿見てなかったんだよ！）

…自分で言えばいいのに。

まあ、俺もマコに欠席されるのが怖くて今日まで言えなかったんだけど。

マコは俺に向いてた視線を、前へと移すと小さくため息をついてから「…しょうがないか。竜揮と元子の披露パーティーを欠席する訳にもいかないもんな。…大体、今更顔を合わせたからって何かが起き

る訳でもないし。」

と、力無く笑って見せた。

…俺は何か起きそうな予感が凄いするんだけど…

だって、あの純子だぜ？

絶対、俺やマコに絡んで来るに決まってる。

俺はそんな事を考えながら、見えて来た駐車場に車を止めた。
そのまま車を降り、店へと足を進める。

「マコちゃん！」

マコと店へ入ろうとした時、後ろから呼び止められた。

マコと一緒に振り向くと…

…可愛い…

俺はおもわずニヤけてしまった。

そこには、セクシーな赤いドレスの美咲と、淡いピンクのふわふわ
ドレスを着た由恵が居たのだ。

…ちなみに俺が見とれたのは…

もちろん美咲！

ドレスから見える長い手足も、ふわふわのアップにした髪の毛も、まるでハリウッド女優みたいじゃないか！

本当にいつまでも見ていたい…

…痛いっ！！

俺は痛み出した右手を見える。

そこには頬を膨らませて俺の腕を抓る由恵がいた…

「…私も居るんですけど」

由恵は小さくそう言うと、大きな瞳で俺を睨み付けていた。

ピンクのふわふわのドレスに、綺麗に巻いた髪の毛。

…確かに可愛いんだけど…

「…なんか綿あめ食いたくなっただけ…」

俺はぽつりと呟いた。

その一言に、由恵はますます頬を膨らませ

「トモなんて、売れないホストみたい！」

と残して店へと入って行った…

…売れないホストって…

俺は店の窓ガラスに移る自分の姿をぽつんと見つめた。

第12話

「美咲！なんか飲む？」

マコが美咲にそう聞きながら、飲み物を持って歩いている店員さんを呼び止めた。

美咲はそこからオレンジ色のカクテルを手に取りマコに笑いかけてる。

俺も手元の白ワインをグイッと飲み干すと、店員さんのトレイの上から新しいグラスを手にとった。

…つまらない…

…つまらない！つまらない！つまらない！

…立食スタイルのパーティー会場で、俺は一人ぼっんとしていた。

タツは元子の手を取って、皆に挨拶に回ってるし。

由恵はあれから機嫌が悪く、俺に話し掛ける事なく別の友達の所に行ってる。

高校時代の友達の所には…純子が居るから行きたくないし。

…マコはやたらと美咲にばかり話し掛けるし…

「…そんなに純子が気になるの？」

俺は、美咲がトイレに行った際にマコに聞いてみる。

マコは驚いて俺を見てから、言い訳しようと言葉を探しているが…俺はそれを遮るように口を開いた。

「…何かにつけて美咲美咲って…まるで、今は美咲が居るって純子に見せ付けたいみたいだよ…」

その言葉にマコは真っ赤な顔をして

「…そんなんじゃないよ」

と、ワインを飲み干した。

…わかりやすい奴…

俺も小さくため息をついてからワインを飲み干す。

それを見てマコが店員さんを呼び止める。

「マコ！トモ！」

突然後ろから誰かに呼ばれ、俺は声の方へと振り向いた。

…げっ！！

俺は慌ててマコへと視線を移す。

マコは大きな口を開けたまま固まっていた。

「…久しぶりじゃん」

俺は、視線を黒のドレスに身を包んだ純子へと移し、慌てて声を掛ける。

純子はその言葉にニコツと笑うと

「元子の旦那がタツだったなんて超びっくりだよ！」

と言ってマコへと視線を移した。

純子は大きく胸の開いた黒いドレスに、長かった栗色の髪を顎のラインで切り揃え、まるでキャバ嬢の様に髪を盛っていた…

俺はそんな純子を見て、昔母ちゃんに読んで貰った白鳥の湖に出てきた意地悪なお姫様を思い出した。

しかし、栗色のボブというヘアースタイルがなんとなく美咲に似ているが、人によってこれほどまでに印象が変わるのだから不思議なもんだ…。

確か白鳥の湖も二人のお姫様が出てきてたっけ。

そんな事を考えていると

「…智博！俺もトイレ！」

…マコが早足で逃げて行った…

純子は慌ててマコを止めようとしたが、あまりの早さで立ち去ったマコを止める事が出来なかったようだ。

そんな二人をよそに、俺も純子に気付かれない様にそーっとその場のから立ち去ろうとした。

…が…

「…トモ！」

純子が俺の腕を掴む…。

そしてそのまま自分の腕を絡ませてきた。

「…マコ、久々に会ったのに冷たいよう…トモは優しくしてくれるよね？」

そう言つて上目使いで俺を覗き込む純子。

…俺の視線は大きく開いた純子の胸元に釘付けになった…。

「…ねえ、トモ？さっきマコと一緒に居たのって藤井美咲でしょ？マコと付き合つてるの？」

純子は尚も上目使いで聞いてくる。

俺はその質問に何も答えずに、俺の腕に絡み付いた純子の腕を振りほどく。

しかし純子はそんなのお構いなしに、またも俺の腕に自分の腕を絡み付かせる。

そして

「藤井美咲って男遊び激しいらしいじゃん！マコ大丈夫なの？遊ばれてるんじゃないのかな？」

と言つてきやがった！

俺はその言葉に、さっきよりも強く純子の腕を振りほどくと純子を睨み付けた。

「美咲はそんな奴じゃないから大丈夫だよ！大体、元子の友達なのによくそんな事が言えるな！」

俺はかなり苛々しながら純子に言葉をぶつける。

純子は分かりやすい程に頬を膨らませると

「…だってマコ、そういう人に引つ掛かりそうだから心配なんだも

ん……」

と呟いた。

俺はそんな純子を見殺しにして歩き始めた。

……なんだか純子の言葉が、純子がマコを弄んでいたと認めているような気がして余計に苛々させた。

しかし俺はすぐに足を止めた。

淡いピンクのドレス。

腰まで伸びたふわふわの髪の毛。整っている訳ではないが、何だか引き付けられる顔立ち。

俺は一瞬で、目の前に立つ彼女に見とれてしまった。

……めっちゃめっちゃ好きだ……

「純子！」

彼女はそう言って柔らかい笑顔で純子の元へと駆け寄った。

俺はつい、彼女の姿を目で追ってしまふ。

ピンクのドレスも、ふわふわの髪の毛も、柔らかい雰囲気もなんだから由恵に似ている。

多分、顔は由恵の方が可愛いのかも知れない。

でも俺は、彼女から目が離せない。そして、彼女を見付けたと同時に高鳴り始めた胸の鼓動…

…一目惚れだった。

第13話

僕は彼女に恋をした

そんな映画のようなフレーズが俺の頭を過ぎった。

彼女は純子の元へと駆け寄ると楽しそうに何か話し掛けている。
俺は、彼女をただ見つめていた。

そんな様子に純子は気付いたようで

「トモ！」

と、俺を呼んだ。

…まずいな…

純子は変な勘だけは鋭いからな…

しかし、そんな想いとは裏腹に純子の方へ歩き出してしまふ俺の足…

…なんでこんなに素直なんだよ俺は…

「紗英！トモだよ。元カレの友達なんだ。」

純子が、彼女に俺を紹介する。

紗英ちゃんって言うのか…

俺は出来る限りの笑顔で彼女に微笑む。

「よろしく。トモって呼んで。」

俺の言葉に、彼女は目を大きくして俺を見つめた。

…ヤバイ…

そんなに見つめられると心拍数が上がる…

「カッコイイね！凄いびっくりした！」

彼女は突然そう言うと、ニコツと俺に笑いかけた。

…カッコイイ…

その言葉に俺の鼓動は更に早くなる。

もしかして、彼女も俺に一目惚れ！？

俺は思わずニヤけてしまいそうなのを必死で我慢する。

笑うのならばカッコイイ笑顔で笑わなくちゃ！

俺は出来るだけクールに彼女に笑いかけると

「ありがとう」

とだけ言った。

彼女もつられて笑った顔がまた可愛いくて、俺の萌え萌え指数を上昇させた。

すると、不意に純子が険しい顔で俺の後ろを見つめている事に気付く。

紗英ちゃんも、目を大きく開いて俺の後ろを見つめていた。

俺もつられて振り返る。

…そこに立っていたのは美咲と由恵だった。

「トモ？マコちゃんは？」

美咲はニコツと笑いながら俺に尋ねた。

俺がそれに答えようとする…

「誠ならトイレに言ったよ。」

と、純子が割って入った。

…今まで純子がマコを誠と呼んでる所を見た事がないけど…
何故か純子は美咲に対抗心を丸だしにしていた。

俺は慌てて二人の間に入ろうと

「友達の純子だよ」

と、美咲と由恵に紹介した。

しかし、純子はその言葉に顔をしかめて

「友達じゃなくて誠の元カノでしょ？」

…と付け加えた。

その言葉に驚いた様子を見せたのは由恵。

美咲はいつもと変わらない様子でニコツと笑うと

「そうなんだ？元子とは中学の友達？」

と返事を返した。

その様子に純子は、つまらなそうな表情を浮かべてから

「そうだよ。ってか、藤井美咲ちゃんだよね？誠と付き合ってるの？」

と、美咲に聞き返した。

…何なんだよこの空気…

肝心のマコは居ないし…

俺は二人の間でオロオロしていた…。

美咲は、純子が美咲を知っていた事に少し驚いた様子だったが、直ぐにニコニコ笑うと

「そうだよ。」

と答えた。

……。

……。

ええっ！？いつの間に！？

俺と由恵はあまりに驚いた顔で美咲を見つめる。

…ちょ…マコと美咲付き合ったの？

俺の許可も無しに？

ずるい！ずるいずるい！

「…美咲っ！」

すると、突然マコが美咲の手を引っ張った。
美咲はそのままマコに手を引かれて行く。

俺と由恵も慌てて二人を追いつける。

ちゃんとマコに話を聞かなければ！

しかし、美咲は俺達の姿をちらりと見ると足を止め

「…マコちゃんごめんね？嘘付いちゃった。」

と、舌を出して笑って見せた。

…嘘かよ…

俺と由恵はがつくりと肩を落とす。マコは一人、意味が分からずに

「嘘？」

と美咲に聞き返した。

美咲は少し申し訳なさそうに俯くと、視線だけをマコに向けて

「…マコちゃんの元カノに…マコちゃんと付き合ってるのかって聞かれて…つい…そうだよって言っちゃった」

と答えた。

…

…萌え…

ヤバイよ美咲！それは萌え指数がヤバイ高いよ！

美咲にそんな事言われたらマコは…

…ほら…真っ赤な顔して…

必死で照れを隠してるよ…

あーあ。羨ましい。

「…トモ？」

突然、由恵が小さな声で俺を呼んで、俺の手を引き出した。

何となく俺もそのまま着いていく。

「…邪魔になるから向こうに行こう？」

成る程。

俺もそれに頷いて、黙って由恵の後ろを着いていく。

俺達は飲み物を手に取り、カウンターへとやってきた。

でも、やっぱり由恵と二人は気まずいな…

そんな事を考えながらいると…

俺のポケットからメールの着信音が流れ出す。

差出人は…

…純子…

…俺はその名前を見て、アドレスを変えていなかった自分に激しく後悔した。

そしてそのままメールを開く。

内容は…

「この後、マコと紗英と四人で抜け出そうよ。」
だった

第14話

…どうしよう…

俺は、純子からのメールで激しく悩んでいた。
普通に考えて、純子と一緒に飲むのなんて嫌だ。
しかも、マコと純子をこっそりと会わしたくもない。

…でも…

俺の頭の中に浮かぶ紗英ちゃんの笑顔…

もう一度会いたい…

「トモ？何考えてるの？」

由恵が俺の顔を覗き込んで聞いてくる。

俺は何も答えないまま、手元の携帯をポケットにしまい込む。
由恵は少し怪訝な表情をしてから、カクテルを一口飲むと

「…さっきのマコの元カノ…トモにべったりくっついてたね。」

と言ってきた。

「あいつは男なら、誰にでもあだだよ。」

俺は、自分の手元を見つめたまま軽く返事をする。

由恵は俺の言葉に、ちらりと俺を見てから

「…マコ可哀相…」

と呟いた。

…確かにマコは可哀相だ。

純子と付き合う前までは、そんな事など全然思わなかった。むしろ、俺なんかはマコが羨ましいとすら思っていた。

だって、純子のボディタッチに、純子は俺が好きなんだと勘違いもしていたし…

だけでも、マコと純子が付き合い始めてからは純子に振り回されるマコを可哀相だと思い始めた。

そして結局、元カレが忘れられないという理由でマコを振った純子…。

…本当最悪。

と思いきや、今日の態度。

しかも、四人で抜け出そうだななんてよく言えたもんだ。

…でも…

あああ…会いたい…

紗英ちゃんに会いたいよ…

俺は頭を抱えながらテーブルに俯せになる。

隣で由恵が怪訝な表情をしている事に気付いて、慌てて笑顔を取り繕ったが、由恵はますます俺を見つめていた。

「…誰の事考えてたの？」

由恵は俺を見つめたまま聞いてきた。
俺はその視線がめっちゃめっちゃ痛くなって、自分のグラスに視線を落としながら

「…マコ」

と答えた。

…嘘はついてない。

俺は一軒の居酒屋の前で立ち止まる。

…やばい緊張してきた…

少し深呼吸しなす俺。

それにしても…結婚式の二次会で居酒屋をチョイスするとは…

外観を見る限りじゃ、とてもこじんまりとした居酒屋のようだ…。
多分カクテルなんかは置いてないんだろ…。

そんな居酒屋の前でスーツ姿で佇む俺。

俺はネクタイを取り、ボタンを二つ開けた。

…何が始まるが分からないが…いざ出陣！

…ガラッ！

「いらっしやい！」

お店の引き戸を開けると同時に、響き渡る元気な声。

多分、その声の主であろうタオルをかぶった、30代位の店主らしき人がカウンターに立って焼鳥を焼いていた。

そしてその前にはカウンターに腰を降ろした純子と紗英の姿が…。
二人はドレス姿のまま、焼鳥を頬張っていた。

お前ら、俺のスーツよりも浮いているぞ？

「あつ！トモ来た！すーちゃん、テーブルに移動するね？」

俺の姿を見つけるなり、純子はそう言っで自分の飲み物を持って、テーブル席へと移動を始めた。
紗英ちゃんもそれに続いて移動を始める。

…何だよ…その常連さんチックな会話は…

俺は、一応すーちゃんと呼ばれた店主らしき人に会釈をして、テーブル席へと足を進めた。

「ねえ、トモ…マコは？」

純子が椅子に腰掛けながら口を開く。

俺はその質問に、落ち着いて答える。

「彼女にバレると困るから、後から来るって。」

…来る途中に必死で考えた言い訳。
勿論、いくら待ってもマコは来ない。

マコには何も言っていないから

純子はその言葉に、少し眉を潜めて俺を見たが、信じた様子ですぐに笑顔を作る。

「紗英がね、ここでバイトしてるの。それで私もよく来るんだけど、急にここの焼鳥が食べたくなっちゃって。」

純子はそう言って目の前の焼鳥を一つ手に取る。

俺はその言葉に胸を撫で下ろしながら椅子へと腰掛ける。
そして冷静に考えた。

…急に焼鳥が食べたくなったからって、ドレスで来た!?

どれだけ慌てん坊なんだよ…!?

俺は椅子の背もたれに寄り掛かりながら、店の中をぐるっと見回す。

そんなに広くない店内は、カウンター席とテーブル席が三つだけ。

客は俺達の他には、カウンターにおやじが二人、テーブル席におやじが二人…

揃いも揃って、カウンターの上部に置かれてあるテレビの野球中継を眺めている。

テレビの脇には神棚らしきものもあり、ダルマや鏡餅の飾りものが置いてある。

…見渡せば見渡すほど、女の子が二人、ドレス姿で来る場所ではない気がする…

「トモ！生来たよ。乾杯しよ！」

純子がそう言つて、生ビールを手渡して来た。

紗英はそれをニコニコ顔で眺めてから

「乾杯！」

と嬉しそうにグラスを近付けてきた。

それがまた可愛くて…

俺は途端に笑顔が零れた。

狭い居酒屋だけど

スーツ姿だけど

カクテルないけど

おやじばかりだけど…

来てよかった

俺はそんな喜びを噛み締めながら、紗英に笑顔を向ける。

「乾杯！」

第15話

「凄い嫌な予感がする…」

隣でマコが呟いた。

「…どうする？」

反対隣で美咲が私の顔を覗き込む。

私は、視線を目の前の居酒屋へと向けたままキュッと唇を噛み締める。

…事の始まりは一時間前。

パーティー会場でトモと二人で飲んでいたけど…

トモはずっと落ち着かない様子だった。

私が話し掛けても上の空。

原因なんて分かった

時々、私に気付かれないように視線をマコの元カノへと向けていたから。

トモと彼女の関係なんて分からないけど…

トモの腕に自分の腕を絡ませる彼女を思い出す…

途端に私の胸が苦しくなる

どンドン、トモが私を見てくれないのが分かって…
私の気持ちばかりが溢れ出して…

限界だった。

私は必死に涙を堪えてトイレへと駆け出した。
身体なんて重ねても、心は重ならなかった。
それを感じる度に自分に感じる嫌悪感。

汚い女

身体を差し出しても好きになっても貰えないなんて

可哀相な女

そんな自虐的なフレーズが頭の中に響き渡る。

溢れ出す涙。

上手に息も出来ない。

きつとトモは、こんな私の変化にも気付いてはいないだろう。
私がトモを想って泣いてるなんて、考えもしないんだろうな…。

馬鹿な女

可哀相な女

汚い女

何度も頭に浮かぶ自虐的なフレーズは、私の身体に恐怖を植え付けて行く。

両手で自分の身体を包み込み、ゆっくりとしゃがみ込む。

可哀相な女

馬鹿な女

汚い…

「由恵!!」

突然、誰かに肩を掴まれ私は顔を上げる。

「…み…美咲い…」

美咲の顔を見た途端に、現実へと引き戻された安心感から涙が溢れた。

美咲の暖かい表情と、私の頭を撫でてくれる暖かい手。

それが、私の心を落ち着かせた。

美咲は何も聞かないまま、私の頭を撫でてくれた。

「由恵は泣いてても可愛いね。」

美咲が冗談まじりに言った、その言葉が「泣いてもいいよ」って言うてくれた気がして

さっきまでの自虐的な気持ちを溶かしてくれた。

あんなに最悪な気分だったのに、凄く心が暖かくなった。

そして、美咲の胸の中で気付いてしまった気持ち。

トモと身体を重ねた事が、こんなにも私を傷付けていた

トイレから出ると、マコが私達を待っていてくれた。

そして、マコの言葉が私を尚更震えさせた。

「…智博、多分どこかに行きそうだけど…僕たちはどうする？ 飲み

直す？」

その言葉に私は慌ててトモの姿を探す。

…トモはキョロキョロと周りを見ながら、出口へと足を向けていた。

端から見ると凄く笑える姿だったのだけど…

私はそんなトモの姿に、また息が乱れだした。

…でも

美咲は、私の掌をギュッと握って悪戯気に笑って見せた。

「ねえ、トモ怪しくない？皆で尾行して驚かせようよ！」

その言葉にクスクスと笑い出すマコ。

私は少し驚いて美咲を見たけど

美咲に握られた掌がとても暖かくて、少し勇気をくれた。

…そして、尾行作戦の末にたどり着いたのが一軒の居酒屋だった。

マコの元カノと一緒にかもしれない……そんな不安は居酒屋を見ると大分薄れていた。

パーティー帰りの女の子が寄りそうな場所では決してなかったからだ。

でも、そんな期待はすぐに奪われた。

小さな居酒屋から漏れて来たのは、楽しそうな女の子達の笑い声だった。

そして、その声を聞いた途端に表情が変わったのは

マコ

私はそんなマコを見て確信していた。

中に居るのはマコの元カノだ

第16話

「…ねえ、トモー！マコはまだ来ないの？」

純子がわざとらしく俺の顔を覗き込みながら、甘い声を出す。

俺はそんな純子を軽く睨んで

「まだ俺が来てから30分しか経ってないだろ。…まだまだ来ないよ！」

と答えてからビールを煽る。

…さて、どうしようか。

俺は頭の中で思考回路を巡らせる。

いくら待とうが、マコは来るハズもない。

俺が純子と会ってるなんて知る訳もないんだから。

問題は、どのタイミングでマコが来れなくなったと嘘をつくかだ。

…正直、純子と一緒に居ると俺の苛々は積もる一方だ。

早いとこ紗英の連絡先をゲットして帰ろう。

俺は純子の隣に座る紗英をちらりと覗き見る。

白い肌がほのかに赤くなって、赤ちゃんみたいに可愛い！

紗英はニコニコと笑いながら、日本酒を自分のコップへと注いでいる。

… 日本酒!?

「えっ!?! 紗英ちゃんが飲んでるの日本酒!?!」

俺は慌てて紗英に尋ねる。

紗英は少し驚いて俺を見たが、直ぐにニコニコ笑って頷いた。

「紗英は日本酒好きなんだよね。」

隣で純子が、口を挟む。

… 好きって…

そもそも日本酒ってコップで飲む物なのか!?

しかし、コップ酒を煽りながら焼鳥を頼張る紗英は

どう見てもおやじ臭かった

… だけど、それも無邪気だからだと感じてしまう俺は
恋の病に侵されているんだろうな。

この30分で俺は随分、紗英の事を知り始めていた。

元々は青森の出身らしく、中学の時にこっちに転校してきたらしい。

元子や純子とは、中学が一緒に仲が良くなったらしい。

純子は

「紗英が私にくっついて離れない」

何て言っているが、俺は逆だと思っていた。

元々、友達が多く顔が広い元子が紗英と仲良くなるのは容易に想像出来る。

…が…

友達も少なく、自己中心的な純子は紗英を引き連れているようにしか思えなかった。

しかし、こうして純子の我が儘にも文句の一つも言わずに一緒に居る紗英は、尚更性格の良さを伺わせていた。

…それにしても…

「本っ当にここの焼鳥は旨いねえ!!」

俺は、焼鳥を頬張り店主のすーさんに声を掛けた。

すーさんは俺の言葉に嬉しそうに微笑みながら、焼鳥を焼き続けて

いた。

その言葉はお世辞なんかじゃなく本心だった。

この味ならば、どんな状況でも食べたくなるのが分かる！！

そして、その言葉に気を良くしたのがもう一人…

「店長はね、凄くこだわって材料も選んでるし、秘伝のタレも絶品でしょ？」

紗英だ。

紗英は俺が旨そうに焼鳥を食べる姿を、嬉しそうに眺めながら答えた。

そんな笑顔に俺も嬉しくなってくる。

本当に、可愛いすぎる！

俺はニヤニヤと笑顔を浮かべて紗英を見つめていた。

…ああ、これが二人きりの空間ならばどんなに幸せだっただろう…
白い一軒家

仕事に疲れて帰る俺。

ドアを開けると可愛い子供達と白いエプロンに包まれた紗英。
とろける笑顔で紗英は俺を迎えてくれるんだ。

（あなた、おかえりなさい。ご飯にする？お風呂にする？…それと

も…)

…ガラっ!!

「いらっしゃい!」

妄想を繰り広げていた俺だが、すーさんの声で思わず入口へと視線を向ける。

「マコ!」

…隣では純子の嬉しそうな声…

俺は、入口に佇む三人組を見つめたまま思考回路も身体も固まっていた。

マコの後に見えるのは、由恵と美咲…

純子は二人を見つけると、あからさまに嫌そうな表情を浮かべていたが、俺は何が起こったのか全く理解出来なかった。

「…ちょっと！トモ！どどういう事！？」

純子が囁く様に聞いてくる。どどういう事かなんて俺が聞きたい位だ！！

三人は店内へと足を進めると、何故かカウンターに並んで座りはじめた。

…？

「ねえ！何でこっちに来ないの？」

純子が小さい声で尋ねてきた。

…そんな事、俺に聞かれても分かるはずがない。

…まさか三人は偶然にこの店に来たのか？

しかし、あのよそよそしい態度を見ると…俺達がここに居る事を知っていたに違いない…

…何でばれたんだ？

俺は口を開けたまま三人の背中を眺めるしか出来ないでいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4306e/>

恋の隠し場所

2010年10月22日00時12分発行